各年度の講座の内容

昭和 55 年の夏休み「ひょうご 280 サマースクール」と銘を打った,余暇利用の学習講座が開始された。
対象は,兵庫県下の学校に通う小中高の生徒で,学校・学年の枠を越えたユニークなサマースクールであった。
主催は,兵庫県・県教育委員会の後援を受けた財団法人 21 世紀ひょうご創造協会である。
初年度は,実施コース名が,英語・国語・音楽・理科・数学・歴史であったため,予備校の一種ではないかという受けとめられ方も一部にあった。
翌年から,コースの種類は,50 に増え,高校生対象のものは、17 講座である。
内容も年々充実し、季節も冬休み、春休みが加わり、事務局を県立嬉野台生涯教育センターに置く,「ひょうごュースセミナー運営委員会」が,実施運営にあたる。
パソコンブームもあって BASIC 講座は,かなり人気のあるコースである。
各メーカーの協力で,その年度の最も普及した,新しいものを 1 人か 2 人で 1 台使用するという好条件に恵まれた。
期間は,8 月の上旬 1 週間,毎日,朝 9 時半から 4 時半という密度の濃い授業である。

昭和 55 年度　旧理振学校電卓 I 型対応機種である SHARPPC-3100 を使った。16×40 文字のディスプレイを持つ本格的なパソコンで、それまでの電卓と比較できないほど視覚的に生徒の理解も速かった。ハードコピーは、40 文字の放電プリンターを使用した。
当時はまだ BASIC の走る低価格のパソコンも店になく、募集人数も少なくした。
応募期間もしばらく伸ばしてのスタートであったが,欠席者もほとんどなく好調なすべり出しであった。
半数は 1 年生で、最も遠距離は,香住高校。普通科の生徒が多かった。

昭和 56 年度　オールインワンの設計で作られた SHARPMZ-80K である。
プログラムのロード・セイブに場所を取らないなど、操作性に優れていた。
画面上の編集機能がつき、リストをとりながら、プログラムの修正ができるのでより生徒の学習が定着していったように思われる。

昭和 57 年度　SHARPMZ-80B。
前年度の 80K と同じ流れの機種であるが,さらに機能アップしたもの。
このころになると、個人でパソコンを持っているが,操作方法がよくわからないので参加したという生徒も交り始める。
会場が明石の県立図書館になったことで、阪神間が減少し,神戸,明石が中心になってきた。

昭和 58 年度　NEC の PC8001 をディスク付きで、使用した。
その上,4 台に 1 台の割合で,プリンターも設置し,自由にハードコピーを取らせた。
2 台に 1 台の場合,長いプログラムを作ると,カセットにプログラムを取り込んで交代するのにかなりのロスタイムが生じるが、ディスクの場合は、かなり楽である。
また,バグ探しが,プリンターのリストを得ることで、容易になった。
ディスクの一斉立ち上げ時に,ヒューズが飛び,別の電源を引くことになる。
この年度から申し込み締め切り日までに,定員オーバーになったり、最初からある程度のパソコンの知識を持っている生徒がいたりするようになった。

昭和 59 年度　SHARP　X-1。一人に完全に一台使用できるようにした。
パソコンからの放熱を下げるため,窓をあけ扇風機をまわし続けた。
また,カラーディスプレイを使用し,グラフィック機能もつける。
音楽も三重和音まで可能なため、後半では,かなりにぎやかでカラフルな授業になった。
生徒の質的な変化も起こり,パソコンに興味を持つ生徒に加え,「学校のパソコンの授業についていけないので、補習として受けにくる」,「就職に有利だから受講したい」という層が増加してきた。
また中には,ゲームセンター的発想から抜け切れず,テニスでダブルスのゲームを作りたいからと「ダブルス」というコマンドを勝手に作り、動かないと質問にくる生徒がいてびっくりした。より,大衆化し,どこでも誰でもサイコロをふる感覚で、キーを叩く時代になったといえる。

昭和 60 年度　MSX 仕様。ナショナル CF3000、ソニーME220。例年と異なり、例題→例題の変更→練習問題という並べ方のテキストを作成。上達者には他の人の作ったものを自分なりに変更させることで、より命令を理解させた。

授業の形態とまとめ

「パソコン講座」に集まった生徒は,いずれもパソコンに興味を持っている生徒達ばかりである。
義務的にノートをとったり,成績を気にして教師の顔色をうかがうということは、まったくない。
好きだからこそ,毎日,昼休み中も弁当を食べながら、画面を見続ける。
後で作文でも紹介するが,連日 7 時間に及ぶ集中講義を受けながら、時間の経過を忘れてしまっている。私学女子校,工業高校、商業高校,男子校,進学校.....様々な学校から,学年に関係なく同じ机を使うわけである。
県立高校で,同じ生徒を教え続ける私たち教師にとっても,このような授業形態は、得がたい経験である。

教える教師も 3 人である。一人が,黒板を使用して説明している間,他の 2 人は,机間巡視をしながら操作ミスの指摘や、質問に答える。
2 年目あたりから、テキストのパターンも定着し、新しい機種に応じた部分を付け加えて教材作りをした。
たえず、連絡をとり、「この部分は,まだわかっていないから明日,追加しよう」とか「この分野は私がやってみたいから交代してしゃべろう」とか話しあった。
これらの経験は,いずれも、普段の学校の授業では,得られない形態である。
生徒の興味・理解度を正しく把握できないまま、一方的な講義形態に落ち入りやすい現状がある。
逆にいうと,動機付けをうまくやり学習意欲を刺激すれば,「分かることの喜び」がまだまだ共有できるといえるだろう。
生徒の意欲に押しまくられての一週間は,かなり疲れたが、心地良い疲労感でもあった。

「パソコンの授業」の良いところは,進度の違いが,あっても同一の教材が,使えることにある。
例えば,A,B を乱数発生で求めて,A×B を求める場合、できる生徒は,誤答に対して,正しい答えを表示させたり,正答が出るまで,次の問題を出すかも知れない。
また,10 題出題させて、正答率を表示させることもできる。ある程度の基礎知識ができれば,このように,問題を次々とふくらませることができた。